



世界を知る ～It know the world～

このページでは、「世界を知る」をテーマに独立行政法人国際協力機構(JICA)デスク熊本や、国際交流・協力分野で活躍している皆様のご協力を得て、日本で生活する私たちには日常知ることができない興味深い世界の状況を紹介します。

世界へはばたけ！ネパールのコーヒー

青年海外協力隊 OG かわそえ あさひ 川添 安紗比さん

(平成 25 年 3 月～平成 27 年 3 月 ネパール派遣 職種：村落開発普及員)

ネパールでは、道端で知り合いに出会うと、「ナマステ！サンチャイフヌンチャ？チャピューヌバヨ？」

(こんにちは！元気ですか？紅茶のみましたか？)と聞かれます。ネパール人にとって紅茶を飲むことは生活の一部で、飲んでいけばいつも通り、飲んでいなければどうしたの？と会話が続いていきます。

このように会話の一部になるほど紅茶文化が浸透しているネパールですが、実は今、コーヒーの生産量が増えてきています。私は、ネパールのシャンジャという地域にあるコーヒー生産者組合で組織強化や帳簿指導の活動をしてきました。この地域では約 20 年前からコーヒーの栽培が始まり、現在ではネパールで一番の生産量を誇ります。なぜネパールでコーヒー栽培が盛んになってきているのでしょうか？これには大きな理由が 2 つあります。

1 つ目は、すぐに現金収入を得ることができることです。コーヒーの収穫・加工の時期には、連日多くの人たちが組合にコーヒーチェリーを売りに訪れ、その場で現金収入を得ています。多い日には 2 トン以上も集まりました。2014 年～2015 年のコーヒーチェリーの買い取り価格は 1 キロ当たり 70 ルピー(日本円で約 58 円)。日本人の感覚では安いと感じてしまうかもしれませんが、ネパールでは 1～2 回食事ができる金額なので、決して安いわけではありません。また、出荷前には全ての豆を手作業で選



↑コーヒーのハンドピッキングをする女性たち

別するため、多くの女性たちが作業をしにやって来ます。中には少しでも収入を増やすために高学年の子供を連れて一緒に作業をしている¹⁾女

性もあり、雇用創出と現金収入向上の役割を果たしています。

2 つ目は、国内・国際市場の受け入れ状態が整ってきたことです。過去には、生産しても国内での消費は少なく、国際市場でも買い手がつかず、買いたたかれる時代がありました。しかし、出稼ぎ帰りの労働者や観光客の増加で国内消費量が増え、それに加えてコーヒー豆輸出の主軸を担ってきたブラジルをはじめとする南米・中南米諸国での不作、中国など新興国の消費量増加によって、世界的にコーヒーが不足しています。また、フェアトレードⁱⁱ⁾の追い風もありネパールのコーヒーを適正価格で取引できる市場が整ってきました。

このような理由から、ネパールのコーヒー生産はまさに「旬」を迎えているといえます。一緒に仕事をしてきた生産者は、「生産量はもちろんだけど、世界一おいしいコーヒーを作れるようになりたい。」と話していました。実際、高品質の豆が作れるようになってきています。まだまだ知名度が低く生産量が少ないネパールコーヒーですが、世界へはばたいてほしいと心から願っています。

☐コーヒー加工所の作業員たちと↓



- i) 児童労働について：ネパール政府は児童労働を禁止する国際労働機関 (ILO) の一連の国際条約を批准し、児童労働の撲滅を図っているが、文化的に子供も家族を助ける貴重な労働力という考えが根強く残っており、貧しい家庭では特に子供と一緒に働いている。
- ii) フェアトレード：公正な取引。発展途上国で作られた作物や製品を適正な価格で継続して取引を行うことで、生産者の持続的な生活向上を目指すこと。